

廣益俗說辨四

皇子后妃
公卿

13

954

5

廣益俗說辨卷七目錄

皇子

新

日武子吾妻とけさる説 附 草薙劔乃説

補

宇治稚郎子百濟乃表と臨み説

新

早良太子蒙古人と戮み説 附 葛蒲曹乃説

后妃

一

神功皇后乾珠滿珠と龍宮小假て新羅と後へり弭

小て新羅王と日か乃拘りりと出るよ書 終

奴説

954
卷 八

補

雄略帝后播磨媛帝後諫め説

二

光昭皇后洛室よをみて阿國佛と拜し給ふ説附

后聖武帝小先事にて薨せし事敬帝追慕れぬ小

東大寺建立し給ふ説訂補

新

井上皇后大蛇とてなる説

三

南朝乃准后藤子追出せし事説

廣益俗説辨卷七

井澤長秀 輯録

皇子

新日本武尊吾妻少とれし事説附草薙劔の説

俗説云日本武尊尾張國よをり松子嶋とてふ所此源を

中よりおとけ家よりすりたる事女忍戸姫よ幸ふ事

所説事とて後河國富士郡とておとけの所其國の凶

徒は野よ將てわそとせ給へし事これいさ出てわそひ

給ふ凶徒等野おとけとてあちてやまらふさんとておと

る帶より入る天叢雲劔をぬき帯を薙てたより給

ひぬ毛よりて帯を薙劔と名付し其後尾張よかへて

今按より源氏更なる事非なり日本紀より日本
武尊更還於尾張即娶尾張氏女宮貴姫而淹留

古事記云尾張國造之祖美夜受比賣。尾張風土記云尾張連等遠祖宮酢姬。姓氏

錄云尾張連（今尾張國）火明（今尾張國）命之子（今尾張國）天香山命（今尾張國）之後也。○神

皇正統記云、信濃より尾張へ出陣しかの頃、久美實姫といふ女あり、尾張の猶種宿禰の妹也。少き記を以て宮簀姫^{ミヤスヘ}乃事と若戸姫^{ニハト}とあ

やまろ且藝固乃社内小源寺乃祠ヤロと云わくト部案

邦乃神道百首和歌抄小道祖神代記家と記と云

祠ヤサとわやまうて岩戸姫イハドメ父とと又また駿河スエ國クニ富士フジ山ヤマ

て尊劔ミコツルギと援スベく草薙ナギまゝとひわらひ劔ツルギをひく

如きて草薙薙の如く草薙薙と号すと云ふ

子細わり山崎スイカ加云ミコト日本紀ミコト註ミコトと尊所ミコト佩ミコト叢雲ミコト劔ミコト自ミコト

抽て尊^{おタハラ}に傍^{ナキ}乃草拔^{クサ}薙^{ナギ}る所あるまじくして免^{メヌカ}ふべし

とけりなりミな各ナキ草薙ケニ劔と號とけとわたりコウ後人の
 加筆カヒツなるを一其子細ハ是よりシ神代卷ウイマキ又天照太
 神天津彦アミツヒコ火瓊々杵ヒラノホノミコト草薙劔クサナギノケニ賜タマふなり
 けりアヒ其系ハラ中国ツクニ小定サタなりヌシ然ホタル火光神ビノカヤクカミ蠅聲サハナス
 邪神アシキカミ草木言語キノモノイフなりユ提ヒツサケ是靈劔コレヒタルンミツ平天下ケカ利萬民タタムタミヲ
 中ウラヒ賜タマふなりスヘ皇孫中国アミ天アラ々々フル荒振アタシカミ邪神カニと神
 拂ハラヒふなりイハ子根木コノ立草タチクサ代垣カキハ葉残コトヤメと語止オスクニて安國と
 志ツルギ川ミ先クサナギ後クサナギなりコサナギ草薙と號ナツケさせヨふなりタイラ又サタ先サタあり
 へりイハト草薙ヒツ劔モシを信イハトとけヒメミコトなりアト又アト若戸アト姫アト乃アト此御アト後アト

残すは千松原よ来事接那ー日本紀残考る小
 ミコト ヤミヒ
 病はゆて薨ーあひハ伊勢國能磨井ならんと久
 コウ
 半り又吾妻と成るなり 祝賀遠と日本紀云来
 アツテ
 天守二十八日十月日本武尊相摸よとて上
 ヤマサタケノミコト サカミ
 総よいあらんやう船より一乗舟は海中出て暴風れ
 フミ
 ありとてとてかて御船わたりかり一討る乃妻は鼻橋
 フチメ イロクネチヤ
 姫といふあり穂積氏恐山宿禰の女たりとてふ
 ヒメ ホ ツミウチヲシ スク子 ミス
 志くとも風はあり浪をくくして御船をのりんと次
 十三
 是海神乃公なり神をくハ妻の身とをのりて王命に
 カイ ミン シマウ ミ
 贖て海よりんと見ゆ海北中よハ小暴風とて地
 テカニ ウミ ウミ ホウフウ

やと松岸よはくしと成りきりきり上総より陸奥
 少のりて蝦夷と平け常陸を経て甲斐にいらされ
 うり氏義上野城あつて碓日坂倭名類聚 碓氷 小い半と終ふ
 時より碓日嶺おつて東南とやみ終ていり
 吾孀耶と見たり山乃東北諸國と號て吾孀國と
 以てわく是を此説考へて俗説れわやより成り
 宇治稚郎子百濟乃表と踏あ俗
 俗説云菟道稚郎子百濟より此表を獲たりと云
 地よなりと見えてゆき終てこれよりて紀文なりと成
 りとと刻きり

今按ふみ宇治稚郎子應神天皇乃御みゆ仁德
 天皇乃御みゆ應神帝より御位と遷移され
 以て成神見仁德帝より成神とまゝて見ゆり
 つて身より終て其賢德善なり我朝乃奉伯も
 まりて一詳日本紀に見えり又百濟より此
 表と見えてゆき終て大方なるゆありと云はけ俗説ハ
 日本紀云應神天皇十六年春二月百濟王仁來菟
 道稚郎子習諸典籍於王仁莫不通達文の書と
 云々云々と和訓をなされしと云へて紀典書籍あり
 北史云圖書云日本國より日出處天子致書日没

廣益傳記新編卷之七

處天子無恙云云帝覽不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書
 有無禮者勿復以聞日本王代一覽云推古天皇
 御宇吳朝使と隋煬帝の時よわつて同なり
 小也妹も使とて隋へはつた其書も大に
 所かともあつた其書に日本書紀に天子書に
 日波客の天子恙なりと云ふ煬帝とれをいふ
 文言無禮なりとて悦ばせりわつた既而皇子
 やつて荒道皇子とて煬帝より日本書紀に
 無禮なるをいふた荒道皇子といふは荒
 典籍よりあつた隋の書にわつた倭書に

これなり

新皇良太子蒙古人と號す
 信茂云良親王と光仁天皇第二皇子なり天應元
 年四月初御兄山部親王代詔たまはるる
 今年蒙古來ぬのう風やわつて八良太子
 殊大將軍とてさう同年八月所出陣の
 要は大方勝る道浪たつて矢賊の如く
 漂流をされしと云ふ此太子勝利と藤原社いひ
 まけ同族といひて毎年八月神事なり此神人
 等甲冑弓矢を帯りてさうなる異國降伏

於表して於了今諸國乃舊浦内舊浦鎗當社乃系乳
小なりすゑや

今據る早良親王所見山終親王と記てたまふ
之の事非なり同和後紀と考ふ天應元年山
部親王即位す一は是桓武天皇なり其後所見早
良親王代たまふと記す所見山終親王は永隆
光仁天皇乃子他於親王母井上所見山終親王は
起るたまふと記す所見山終親王は又天
應元年蒙古末多中正史實録に於て是くは
是文永弘安年中蒙古警其れ末終やまはる

乃又舊森社に舍人親王と記す早良天皇と視
中加草載藤森弓兵政所記日當社者舍人
親王之廟也親王者天武帝皇子垂加社諸云按
日本紀曰天武
帝第六皇子。釋日本紀曰第五皇子母新田部
皇女舍人其諱也天平七年十一月乙丑社諸曰
嘉祥親王薨壽六十歲葬于山背國
深草山麓藤尾即今藤森也贈太政大臣奉崇道
盡敬天皇天皇疆識清雅達於神道流於冊書蒐
輯日本紀三十卷又得弓兵神妙之法其兵法秘
而在焉每歲仲夏端午日騎射走馬甲冑帶刀把

弓矢操戈矛祭之延曆年中早良親王爲厲仍謚
崇道天皇薦之當社相殿以親主時崇敬當社也
又同書載御靈八所記曰桓武帝即位之翌立早
良太子何其急也賊殺藤原種繼是太子之所殺
而致則何不宜其罪而廢之也追稱尊號則曰朕
有所思亦何謂也國史不顯記之釋書未可輕信
也又言追稱之號與舍人親王同日崇道天皇而
不有盡敬之號蓋由太子崇敬藤原森而謚之如此
歟當社末社親王坐藤森相殿太子坐烏誠有以
矣とわつ又端午代菖蒲曹官蒲餽當社乃余獲

れら多とつ中氷方り續日紀に聖武天皇天平
十九年五月廿六日天皇南殿御一騎射を馬代是時
代日太上天皇御一て此中より一を月乃良治の
高浦と引ひて傳と引ひてあるすてふ終とつひ
らうて後高浦餽わつとあるは中に入年
たれとわつと天應年中よりあるは中に入年
わつとあるは花を餘情ゆき五月廿六日乃良帝わや先
かひ終とつあるは氏德殿より幸わひて六府給討
事わつとあるは位以上の人名をあるは終とつひ
寮の御馬より幸て競るなり幸わつと西峯松平氏云は初

端午ノ紙とて門で曹及ハ人形を流くる丹ま代やと
 う門戸ノかゝる太平御覽引荊楚歲時記曰採
 艾以爲人懸門戸上書言故事引歲時雜記曰端
 午採艾結爲人懸門戸上以避毒氣也又云と
 つるまゐるものなりとて是を爲る夜と考ふるべし

后妃

一 神功皇后乾珠滿珠代統天皇ノ假て新羅と云ふ人
 弭小て新羅王ハ月ノ初めを岸石ノ事付託
 倭國云神功皇后新羅征伐也此神武天皇ノ海宇
 小す此子阿曇磯良代子孫き流るる後志賀の神也
 磯良代子孫のやうにして河にても豊姫と稱ふなり
 乾珠滿珠とてありとありと稱ふ二つあり珠と稱ふは
 まの滿珠代海といふに似たりと海潮遠く新羅國中に及
 ぬ新羅王初と稱ふはこれ羅代謝とて有乾珠と名けて
 今代とてせむ其後海潮なりと記す海に岸石小新羅

王は秋國の物なりと書せ給ふ此國の人これをいふ
けりといふもききとていふ

貝原好古云神功皇后紀珠璣珠とありて新羅と云ふ人
語ふ事大方る虚説なり但し日本紀は秋七月又日
豊浦乃津よつちと給ふは日皇后如意代珠を海中に
得ありと云ふなり秋日本紀云古伝國吾川於玉璣に
后御船と云ふ給ふなり後述は道遠なりといふ
玉と云ふ名白石と給ふなり事新卵なりといふ
皇后は後を所掌なりと云ふ事給ふなりと云ふなり
かやきと云ふは右に給ふなり海神なりと云ふなり

乃白珠珠なりと云ふなり大に悦と給ふなり其後
はききと云ふ給ふなりは玉今小指別廣田はなり又
春は美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊と云ふなり火酢
命代志と云ふなりは美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
傳ふなりといふなり美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
皇后乃事なりは美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
と神功皇后の死に在り美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
神代乃潮満瓊潮個瓊の死に在り美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
春に玉お給ふなり神功皇后の死に在り美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊
皇后乃事なりは美火と云ふ見ふ潮満瓊潮個瓊

ニッソ^タ珠^{ビニ}代^{サカ}泉^{イニ}別^{カイ}境^{イニ}此^{イニ}敏^{イニ}比^{イニ}の^{イニ}池^{イニ}納^{イニ}光^{イニ}を^{イニ}統^{イニ}さ^{イニ}る^{イニ}
 妙^{イニ}の^{イニ}境^{イニ}は^{イニ}如^{イニ}意^{イニ}明^{イニ}神^{イニ}の^{イニ}法^{イニ}と^{イニ}是^{イニ}す^{イニ}如^{イニ}く^{イニ}是^{イニ}を^{イニ}統^{イニ}さ^{イニ}る^{イニ}
 多^{イニ}かり^{イニ}を^{イニ}二^{イニ}珠^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}れ^{イニ}は^{イニ}海^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}
 近^{イニ}遠^{イニ}の^{イニ}事^{イニ}も^{イニ}て^{イニ}任^{イニ}意^{イニ}に^{イニ}又^{イニ}皇^{イニ}后^{イニ}の^{イニ}舊^{イニ}私^{イニ}を^{イニ}あ^{イニ}は^{イニ}る^{イニ}
 小^{イニ}人^{イニ}の^{イニ}皇^{イニ}后^{イニ}の^{イニ}南^{イニ}海^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}如^{イニ}意^{イニ}の^{イニ}珠^{イニ}を^{イニ}得^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}
 是^{イニ}の^{イニ}法^{イニ}華^{イニ}經^{イニ}の^{イニ}龍^{イニ}女^{イニ}寶^{イニ}珠^{イニ}を^{イニ}と^{イニ}り^{イニ}て^{イニ}世^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}
 一^{イニ}半^{イニ}の^{イニ}皇^{イニ}后^{イニ}の^{イニ}世^{イニ}俗^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}
 大^{イニ}の^{イニ}皇^{イニ}后^{イニ}の^{イニ}御^{イニ}妹^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}
 阿^{イニ}彌^{イニ}陀^{イニ}の^{イニ}皇^{イニ}后^{イニ}の^{イニ}中^{イニ}に^{イニ}あ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}
 わ^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}は^{イニ}同^{イニ}じ^{イニ}な^{イニ}り^{イニ}

王は我國の物なりと書せ給ふと云ふと日本紀に
 后新羅國と云ふ人の重寶府庫と封し國籍の文
 書紙よりたれを託せ給ひ牙と新羅王の門より後
 葉乃と云ふやうある其牙はすくく後也と云ふ新羅
 王の門よりと云ふ紙やまの傳ふるものなり
 摘要。今按ふに皇后新羅王は我國の物なりと云
 記す。書せ給ふと云ふ神代卷より出見する二珠と云ふは火
 酢芥令紙紙は後大酢芥令の苗裔諸集へ今
 小いふと云ふは天皇此美鰐の傍をたれと代味物と
 伝ふるものなりと云ふ紙やまの傳ふるものなり

補 雄略帝后播後媛帝と諫る況

俗況云雄略天皇昔城山に獵し給ふとき舍人十指よわ
びておけりし中ておれさん一は后播後媛これとい
ふめりし先給ひてて代わらる賢女とい

今按ふに近年印行の書に播後媛と姉徳わくと稱
せし説わきまありきことと播後媛と仁徳天皇女めて
母と日向長姫をり播後媛其兄履仲帝とめせし
とて中華姫といふ又雄略帝の后とありし中華
姫とて伯父大兄皇子^{播後姫}の妻とありきといふ妹
代娶とて姪と娶ふ倫理と終滅すといふといふこれ

かんて賢女とす多よといふ

二 光昭皇后^{ヨクニツ}浴室はたて阿闍佛と稱し^附後況
聖武帝は先づいひて薨せ給ふに帝追慕するに
東大寺建立し給ふ況

俗況云光昭皇后佛のたてりしとて浴室は建貴族は浴
びて免るべしといふ人おとと云ひてちひすては九百九十九人
代意し小瀬人來つて湯といふ真氣をくくといふ中を
后千般よそんといふ代りといひこれといふ人貴族といふ
とよりいふ人かきこふといふ人病を脱脱を吐て頂よ
と腫よといふ人いふ人秋に給ふといふ人よかきと

市に疎人忽光とて相ちて秋に阿闍佛とて秋に
去りし人よかたぬとて秋に阿闍佛とて秋に
阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
光の子帝小とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
やうて東大寺に建立すまうとて

武帝乃后光の子佛乃告わうとて浴室とまうとて
阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
寺に建立すまうとて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に

破浴室とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
乃に補羅山子とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
於温湯とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
去千人垢共沐浴とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
云者恐是后托言於瑞異杜謗於衆口とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
右の事とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に
安北宗神秀入禁中供養因澡浴以宮姫給侍安
怡然無他后歎曰入水始見長人ハミナトミルとて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に阿闍佛とて秋に

宣天罰紙すなりまへやまふ紙宣后此悲念よりん
也思ふ八理よりんまふ紙なり

三南朝の准后廉子退出せられし後

信院云後醍醐帝乃御母准后廉子坊門宰相清忠より

倭よりてる功乃臣も抱けり後入るも此ハ後中々帝

色うらみあやせあり准后紙退出わう一六准后是

利子氏の帝よりんそらるる此もたれりうらみ此より

御名事をもたれりわうもいふ

今按ふは准后乃長吉わうて厲乃階とらるる

傷するもあはれなり退出此事も甚だ悲なり

國大曆記帝王系圖太平記と考ふは准后廉子ハ阿比

公廉乃女也後村上帝乃御母後中々新待賢門

院と号し後醍醐帝崩御よりて數年次終て薨し

はぬ孝死集は延元元年八月十六日先帝

と勝あひ二三事とすはつり九月よりハ新待賢

門院より准后とや侍りしころ御廟より御ふと

わうもや思ふなり

集は後醍醐天皇のまへにせありて又乃年れまふ紙

見てより勝あひは新待賢門院とらるる如きは

とやよりわうてかきし如しなりは此れより

小ゆふとくもせあひきぬ九まれ玉乃とておもき分
 もる若れ下に、若れおもへ八同集、新待望つ院か
 く我を治て後三とせまて諒周乃候中わり、年分我
 所づとていゝ事乃又月日さ、城よりきて前入被ふ
 実乃ふまぬとせけぬ後村上院御製今さふ新ふと
 ぬれも三と増もてわめとてとて、かゆとてさ
 わり毛等と考へ事信院の相違ともあへー

廣益俗説辨卷七

廣益俗説辨卷八目錄

公卿

補 道臣余物部乃祖ゆて武士代とれぬ、訓と候

補 ちび笑とて候

補 鹿戸皇子代八耳と稱と候

補 守屋大目と逢公とて候

一 大織冠鎌足蜜女とれとて実珠とありと候

二 柳中人麻呂柳樹より生れとて候、上総國は流とて

中い候、訂補

三 乃於仲麻呂鬼とて方にて名候大目とて遠と候、小補

新

菅丞相天よりくろく後

同

輕大長燈臺鬼とくろく後

補

小井皇比獄乃冥官とくろく後

道長命物部乃祖とて武士とてはぬと訓と係
公卿

廣益俗説辨卷八

井澤長秀

輯録

公卿

補

道長命物部乃祖とて武士とてはぬと訓と係

ろく後

俗説云大伴道長命ハもはぬとくろく後

今按ふに武士はぬと訓と係といふは道長にわ

ると宇摩志麻治命の宇摩志麻治令ハ饒速日

多のみめて姓物部とく物部とてはぬとくろく後

乃ぬと訓と係云云舊事紀云宇摩志麻治令

率天物部翦夷逆賊帥軍兵平定海内又云宇摩

志麻治命來内物部乃堅矛楯嚴增威儀又云天

皇武詔宇摩志麻治命曰汝之勲功矣念惟大功

也公之忠節焉推至忠矣是以先授神異之劍崇

報不世之勲今配股肱之職永傳不貳之美自今

以後生々世々子々孫々八十縣綿必胤此職永

爲龜鏡矣後宇摩志麻治命武士乃々先以

て武士とて仕ぬと訓すぬ紀たり

補 厩戸皇子代八耳と稱すぬ説

倭記云厩戸皇子ハ一人一皮ヨリヤミテ成キツリテ成リ

あつて八耳皇子と名けり

今按ふと月本紀云稻田官主養稜之八箇耳神

代並指抄云やのん八耳乃々名とけり

厩戸と八耳と名けり云々はけり云々但薛方山紀述

云或問舜有四耳四自信半曰非然也以四方人

之耳目爲耳目是以無所不聞無所不見斯之謂

四耳四目也禹有九手九足信半曰非然也以九

州之手足爲手足是以不行而至不疾而速斯之

謂九手九足とわくは然と云ひて之ハ厩戸皇子も侍

臣代八方み出とてきうめれまふもれあらん

補 守屋大匠と逆公と云説

俗況云々屋大良延公わう一敬獲我大良既戸以下代備室
子とやととふと終と殊致ととつふ

今按ふよ月本紀云物部弓削守屋大連八尾興うこ
かり敏達帝十三年秋九月獲我大良奴者うひ佛法と
興一佛像二軀ととや先得て石川乃宅を佛殿と
一彼佛と安置一司馬達う女以下三人と尼となして
わうあゆつゝむ十四年乃う二月馬子司馬達うあこ
一さふ舍利と大井兵代あ小塔を建うてま終致をむ
けられ又國は疫病たう民大死とぬまの事とては
守屋大良中良勝海奏うてう何なるぬそあ人うはう

一とて強利をぬきうて河考天皇れどたうり陛下に
あふて疫疾とやう國民まふ終今所是皆獲我
う佛法と興うすぬなうわとやといふあをれん天皇
少あて二居う諫灼然たり宜多く佛法を樹へとわう
あう守屋大連入んう寺ふうて胡床は歸て
塔と所ぬ成一火ととあうてこも成やあ佛像と佛
殿と成やまきとやあわすれぬ佛像とあて新波乃海
あまそ一先馬子うあうとあ尼信馬とあぬ馬子病
終とむくことあうあうあうかたう人わう尼とあう
わあをれん官人尼の衣とううひ海石福帝亭にう

免^ミじら^ミる^ミ馬子^ミ甚^ミ守屋^ミを^ミあ^ミう^ミ用^ミ明^ミ
 帝^ミ即位^ミし^ミて^ミ二^ミ年^ミ夏^ミ四^ミ月^ミあ^ミう^ミに^ミ病^ミを^ミ治^ミ給^ミは^ミ群^ミ臣^ミ
 お^ミ召^ミして^ミ朕^ミ三^ミ寶^ミを^ミ授^ミけ^ミん^ミて^ミ成^ミる^ミ卿^ミ等^ミを^ミを^ミし^ミて^ミ
 及^ミし^ミや^ミう^ミ守^ミ屋^ミ勝^ミ海^ミい^ミあ^ミけ^ミあ^ミう^ミに^ミ國^ミ師^ミ
 と^ミし^ミ他^ミ非^ミと^ミや^ミあ^ミん^ミや^ミり^ミと^ミわ^ミか^ミれ^ミと^ミき^ミと^ミ
 成^ミる^ミと^ミ奉^ミず^ミ獲^ミ取^ミ大^ミ馬^ミ子^ミい^ミあ^ミう^ミを^ミか^ミも^ミ召^ミは^ミ
 ち^ミう^ミあ^ミん^ミを^ミ異^ミを^ミあ^ミう^ミと^ミ成^ミる^ミ人^ミとい^ミひ^ミて^ミ
 豐^ミ國^ミ法^ミ師^ミを^ミ内^ミ裏^ミい^ミあ^ミう^ミに^ミお^ミ召^ミし^ミて^ミあ^ミう^ミに^ミ成^ミる^ミ
 群^ミ臣^ミ馬^ミ子^ミを^ミ黨^ミして^ミち^ミ屋^ミと^ミん^ミて^ミ成^ミる^ミ守^ミ屋^ミに^ミ押^ミ
 飯^ミ部^ミ史^ミ毛^ミ屎^ミを^ミい^ミあ^ミう^ミに^ミ成^ミる^ミと^ミ成^ミる^ミ屋^ミ小^ミ若^ミ大^ミ

連^ミる^ミ成^ミる^ミ阿^ミ部^ミ大^ミ連^ミり^ミあ^ミう^ミて^ミ人^ミを^ミあ^ミう^ミ中^ミに^ミ勝^ミ海^ミを^ミ
 人^ミを^ミあ^ミう^ミち^ミ屋^ミあ^ミう^ミに^ミ守^ミ屋^ミを^ミあ^ミう^ミ物^ミ部^ミ八^ミ坂^ミ大^ミを^ミ
 連^ミ小^ミ坂^ミ漆^ミ部^ミ造^ミ兄^ミと^ミ馬^ミ子^ミ方^ミあ^ミう^ミと^ミ群^ミ臣^ミに^ミし^ミ
 と^ミん^ミて^ミ成^ミる^ミ守^ミ屋^ミと^ミき^ミ信^ミ仍^ミと^ミあ^ミう^ミに^ミあ^ミう^ミに^ミ
 そ^ミけ^ミて^ミち^ミ馬^ミ子^ミ土^ミ師^ミ八^ミ嶋^ミ連^ミ成^ミ大^ミ伴^ミ毘^ミ羅^ミ丈^ミ連^ミり^ミ不^ミ
 お^ミう^ミと^ミし^ミて^ミ事^ミ成^ミる^ミ毘^ミ羅^ミ丈^ミ小^ミ弓^ミ箭^ミ皮^ミ楯^ミを^ミあ^ミう^ミ
 豊^ミ家^ミを^ミ成^ミて^ミ直^ミ夜^ミを^ミあ^ミう^ミと^ミ成^ミる^ミ守^ミ屋^ミと^ミし^ミて^ミ
 か^ミい^ミと^ミあ^ミう^ミて^ミ用^ミ明^ミ帝^ミ器^ミに^ミあ^ミう^ミに^ミ成^ミる^ミ體^ミい^ミあ^ミう^ミに^ミ
 さ^ミに^ミ成^ミる^ミ屋^ミ穴^ミ穂^ミを^ミと^ミん^ミて^ミ成^ミる^ミ子^ミ佐^ミ伯^ミ連^ミ丹^ミ經^ミ
 小^ミ太^ミ師^ミ連^ミ磐^ミ村^ミ的^ミ良^ミ嚙^ミを^ミあ^ミう^ミて^ミ穴^ミ穂^ミを^ミと^ミし^ミて^ミ並^ミ

小宅部皇子と殺さるる子も終く此皇子群臣とす
 きてちを威えんとす。於伯瀬皇子、竹田皇子、厩
 戸皇子、難波皇子、春日皇子、蘇我馬子、宿禰大兄
 紀、巨麻呂、巨勢、比良、支脂、賀賀、葛城、根鳥
 那羅俱等軍兵と率いて大連とて、大伴連、阿
 部、人平、群臣、神子、坂部、糠手、春日、等、の軍兵
 残相具して志紀郡より濃川乃家より入て馬子残
 寺とて、大連人見へ、子方と率いて、福城、淡路
 へ相姉とて、大連衣、楷、朴、校、乃、同、み、れ、り、て、衆とて、
 川と雨乃とて、其軍はく、て、乃、り、が、く、皇子群

水^{ミヅ}淡^ニ故^コ號^{カガ}淡^ニ海^{アヲ}國^{ミナト}以^テ有^リ遠^{トウ}淡^ニ海^{アヲ}國^{ミナト} と云ふ所の海國は遠き所なり

和名歎歎は少細を枕する 號^ス近^{チカク}淡^ニ海^{アヲ}國^{ミナト} と云ふ所の海國は近き所なり

曰^{イハレ}近^{チカク}江^ニと云ふれは不比^{フヒ}等^{トウ}城^{シロ}近^{チカク}に封^{ホウ}せしむるは

海^{ミヅ}と号^{ナヅケ}せりなり又^{マタ}房^{フキ}前^{マヘ}ハ篠^{カネタリ}足^{タリ}り子^コとわたり不^フ

比^ヒ等^{トウ}此^{コノ}次^ジ男^ヲたりる年^{トシ}歷^{レキ}事^{コト}實^{シツ}と考^{カウ}へるは

と云ふへ但^ニ一^{ヒト}似^ニたり事^{コト}わたり日本^{ニッポン}紀^キ小^コ名^ナ恭^{キョウ}帝^{テイ}十^{ジュウ}一^{イチ}

年^{ネン}爲^{タリ}衣^イ通^{トウ}姫^{ヒメ}定^{テイ}藤^{フジ}原^{ハラ}部^ベ 考へるは天武天皇の御代に

同^{ドウ}十^{ジュウ}四^シ年^{ネン}秋^{アキ}九^ク月^{ゲツ}天^{テン}皇^{スミミ}淡^ニ路^ロ乃^ノ鴻^{コウ}乃^ノ符^フ 乃は

麻^マ檍^{セキ}緒^ゾにほ山^{ヤマ}名^ナふらて蠅^{ハエ}乃^ノ出^デるは

と云ふ乃^ノ歟^{ナキヤ}と云ふ得^ユるは

と云ふ乃^ノ歟^{ナキヤ}と云ふ得^ユるは

乃^ノ終^{シマ}るは神^{カミ}事^{コト}なりと云ふ歟^{ナキヤ}と云ふ得^ユるは

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

乃^ノ終^{シマ}るは赤^{アカ}石^{イシ}代^{トコロ}海^{ウミ}乃^ノ底^{ソコ}は美^ミ珠^{ジュ}なり

大蛇といひてうへ山に懸てくはのよは死する繩
伏たうしてうへ山に懸てくはのよは死する繩
さくにま珠後乃あふわう其大さ桃子れこう則得神
おまのり得てたけのり獸得るきう男獲破る死
あふれぬり又墓をけくひてわけく葬ふ其墓を紙
今よりあふれぬり又墓をけくひてわけく葬ふ其墓を紙

二 柳中人磨柳樹よりすすこつ院 附 上総國小流より

やうの院

信伝云柳中人磨八柳樹よりすすこつ院に其名とて又

三 武天皇御宇に上総國よりなぐされ三年よりあつた
と傳ふ云

今按ずるに武天皇御宇に上総國よりなぐされ三年よりあつた
云柳本朝文粹藤原敦光が人丸畫像賛云大ま
之後也敏達天皇御世依家門有柳樹為柳本臣
氏やわうけ院と傳ふて柳樹よりすすこつ院に其名とて又
魚一續本朝文粹藤原敦光が人丸畫像賛云大ま
姓柳本名人麻呂益上世歌人也人丸畫像賛云大ま
仕持統文武之聖朝遇新田高市之王子吉野山
之春風從仙駕而戲る事集事者也時鉄人麻呂やすみ

小流をれきふとわたりて是れ是れ考へて俗説に相違
致す一々今改正如右

阿倍仲麻呂ヘナカテ鬼ロシと云ふて吉城キチ大良より其家説

倭使云吉依大に遣唐使をうりて此唐人其を福と
 みて其の乃樓よれやと云ひこれ乃樓よ鬼われ被害と
 せんといふのであり吉依云ふは然るをて樓よれやふ
 といふて鬼われられていよく卿我をこれに恐るゝかれ
 我をこれ先代遣唐使乃信仲麻呂なり唐人れを免よ
 報害をこれを魂に樓よとて乃て鬼となさるゝやとてかみよ
 所一を父子孫乃事代成君同て唐使をわかれなりと
 唐人樓よ來つて吉依うけふを免を見て大に悦とるゝ
 其夕鬼まゝなりつていよく唐人乃卿亦文選次より
 志ぬわやまらけりわさげり等とて人々と強とて書けりといふ

域よりこれいふは、シヨ書中モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 に其モリ席モリは、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 くるくこれいふは、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 うは、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 わさ、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 ま、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 ひ、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 後、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 詩、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを

今按、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 仲麻呂、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 多治比、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 今按、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを

今按、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 仲麻呂、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 多治比、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 今按、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 仲麻呂、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 多治比、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを
 今按、モリ夜文選コウ文選コウ講コウと予コウと背コウ負コウ入コウを

又とて一わくを紙賞し秘書監より官よりされ

補使臣を國ふつゝして父母に同見于丈天寶十二年仲

麻呂遣唐使清河と同船して改朝とはるに王維包信

陸海詩とありてうも紙に明列し海畔ふらふ

船よりんとす事地古今集註唐人饑賊まてた

より小酒紙のむらとをむむるまひて明月を伴見

注補奥儀ありはゆきけとハ我國乃三笠山紙あひて和歌と

源とわまのちりやうけられまひるうさうやうそい月り

ま依日記にむい安倍仲也といひるうさうにいうて思

ふゆふ移のうさう事やう國の人さのさむきしうれと

しみてやうのうさうけうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

の月りうさうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

化身化體なり上古氣化なりなりてれら陰陽おれり
く傳ふて子孫生るなりとありて化なりなりなり
のち父母よりこれ人なり孫は菅原系名を考ふに菅
原氏出自天穗日命十二世孫可美乾飯根命
裔野見宿禰賜土師姓天應元年光仁天皇改土
師姓賜菅原姓夫より數代相續至於從五位下文
章博士是善是善娶伴氏生菅丞相諱道真字三
名阿兒伴氏是善四男初官家文草云永和十二年し巳生とあり
拾遺和歌集は菅原大臣がうよりなり年夜
母よりふりけり久しき月なりなりとありなり

か海とぬをてうりなり父なり母なりとあり
くよりなりなりなりなり

新輕大臣燈臺鬼とありなり

俗説云輕大臣ハ菅原相なり子みて河内國よりありて時帝
より遣唐使としてけりなりと唐帝不言れ某氏の
すせ身は繪と書有なり燈臺鬼なりかや燈臺鬼とあり
其子彌宰相春衡といふもの齋明天皇二年は遣唐使
なりなりと唐帝よりけりなり一夜は入る鬼燈臺を
鬼なる小春衡と見れりなりとありて源氏なりゆひなり
切其血代なり詩歌と書父なりなりなりなりなりなり

春衡唐帝少子ひききて日かぶるも

今按ふは中朝正史實錄は輕人臣といふ者ぞれせ
と又管丞相乃子といふ事録述なり輕人臣乃子春衡
遷唐使ハ齋明帝ハ許寧とあるハ管丞相出生れ
義和十二年より百九十年年なりといふはこれなり
事者みづかに化せると又盲なる者なりといふ
相傳ふ事あり

補

小冊皇北極乃冥官と云ふ

俗説云小冊皇身ハ朝廷ハ在りて一日ハ二時ハ夜ハ
残地獄より出て冥友と云ふ

今按ふは二程全書にわが人秋氏地獄と云ふ
下根乃人なりと云ふは地獄より出て冥友と云ふ
むと云ふに程より人ハ主體乃天地と云ふは人
化せざるなり現や俗説と云ふは人化せざるなり
一は地獄より出て冥友と云ふは地獄より出て冥友
なり人を生ずるハ理と云ふは地獄相合て形質なり
心神体なり死と云ふは死して二ハ心なりと云ふ
水ありて死して二ハ心なりと云ふは死して二ハ心
なりと云ふは死して二ハ心なりと云ふは死して二ハ心

今^レ之^レ世^ニも^レは^レ俗^ニに^レ依^ルて^レ解^ルと^レ言^フは^レも^レけ^レ後^ニま^ニ
て^レあり^トを^レハ^レ天^ニ子^ニあ^リて^レ人^ニ間^ニ羅^スは^レは^レあ^リハ^ニ公^ニを^レ不^レ
忠^ニ罪^ニす^レに^レ必^ニ刑^ニを^レた^レる^ニを^レけ^レ後^ニと^レ言^フは^レも^レけ^レ後^ニま^ニ
中^ニセ^レハ^レ人^ニと^レ經^テて^レ名^ニ氏^ニ汚^スさ^レむ^ニハ^レ妄^ニ信^ニ多^ク其^ノ罪^ニは^レ依^ル
て^レ已^ニッ^テ不^レ端^ニ比^ニ然^ニと^レ言^フは^レも^レけ^レ後^ニま^ニ

廣益俗說辨卷八終



